批判期前から見たカント哲学(1)

黒　田　敏　夫

カントは1798年９月21日付けのガルヴェにあてた手紙の中で、「……私の出発点は神の存在や不死等の考察ではなくて、 純粋理性の二律背反でした。すなわち『世界は始めをもつ、……世界は始めをもたない等々から、第四の二律背反、即ち、人間には自由がある。……これに反して、自由は存在しない、人間に於ける一切のものは自然必然性をもつ』に至るものです。この二律背反は、即ち私を初めて独断的まどろみから覚醒させて、理性そのものの批判に向かわせたところのものであり、かくして一見理性の自己矛盾のように見えるつまづきの石を除くことができたのです……」と述べているように、自由の問題がカント哲学の出発点であったことが分かる。ところでカントの批判期前の研究は当初は、主に自然探求に向けられている。しかしながら、カントの関心は常に「神」、「人」、「自然」という学問の全領域に向けられているといえる。この論文では批判期前のカント哲学の関心とその方法の変遷を眺めることによって、批判期のカント哲学、更にはカント哲学の全体を貫いている精神を理解しようとするものである。

（１）

カントの育った十八世紀の宗教的背景はどのようであったのだろうか。十七世紀のドイツは、シュペーナー（Ph. J. Spener, 1635－1705）やフランケ（A. H. Franke, 1633－1727）らが、教条主義、儀式主義、僧侶主義に陥っていた当時のルター主義教会に反対して、宗教改革が本来目指していた信仰の内面性を重んじ、聖書に立つ聖書中心主義を唱えていた。これが敬虔主義（ピエティスムス）の運動である。カントの母親はピエティスムスの雰囲気

に包まれた当時の教会で信仰生活を続ける純粋で敬虔な信仰者であった。当時のピエティスムスの影響は母親を通してカントに与えられたとよく言われる。弟子のヤハマンの記述によると「私の母は愛情豊かな、信心深い、正直な女性であった。それに優しい母親であり、子供達を信仰の教えと道徳的規範によって敬神へ導いた。母はよく私を郊外へ連れ出し、神の作品に注意を払わせ、敬虔な喜びをもって神の全能全知と慈愛について語り、私の心中に万物の創造主への深い畏敬の念を与えた。私は母を決して忘れないだろう。それは母が私の内に善の最初の芽を植え付け、自然の印象に心を開かせてくれたからである。母は私の知識を目覚ませ広げてくれた。その教えは私の生涯に常に有益な影響を与えて来た」(1) とある。このように母親の信仰を通して、ピエティスムスがカントの心情の奥底に深い影響を与えたと考えられるのであるが、カント哲学の体系に強い影響を与えたと考えるのは行き過ぎであろう。勿論、一人の人間としてのトータルな人間性、神や自然に対する畏敬の念はピエティスムスの信仰を持って生きた母親から学んだと言えよう。

（2）

カントが師マルチン クヌッツエン（Martin Knutzen）を通してニュートン力学を学んだのは1750年代であった。当時、ヨーロッパはデカルト派とライプニッツ派の間に「力」の概念に関する論争があった。デカルト派は物体の本性を「延長」即ち「空間性」であると定義した。空虚な空間はあり得ず「微細物質」が空間に満ちていると考えた。そして、「自然」は「物体」とその「運動」によって機械論的に説明された。デカルトは「運動」を外延的な場所の変化と考え、「運動」の原因を「力」とは考えなかった。ライプニッツはデカルトの数学的自然学、機械的自然観を批判し、「神の摂理」と「人間の自由」の関係の調停を企てたと言える。そこで究極的な「実体」即ち「単子」(monade) を想定し、その本質は「力」であると考えた。「単子」とはそれ自身、不生不滅であり、外から作用をうけず（モナドは窓をもたぬ)、内的な自発的な力を持つものである。つまり、ライプニッツは「単子」において自発的な「力」と「自由」と、それを受け入れる「神の摂理」の統一を見るのである。神の「予定調和」(harmonie préétablie) の考えによってデカルト的な機械論的世界の根底に目的論的世界観を置いて統一を試みたので

ある。さて当時のドイツはデカルト派とライプニッツ・ヴォルフ派の論争に加え、ニュートン力学の影響が深まりつつある時代であった。カントは処女作『活力測定考』(1747) でデカルト派とライプニッツ派の間で論争になっていた「力の測定」について調停を試みたのである。当時は「力」の概念は十分規定されておらず、デカルト派は「力」を「運動量」(mv：mは質量、vは速度) で表されるところのものであると考えた。それに対し、ライプニッツ派は、「力」を「活力」(mv^2) (正確には運動エネルギー$\frac{1}{2}mv^2$) として表されるものを考えていた。(勿論、当時は「力」の概念のこのような区別は十分には理解されていなかった。) カントはこの両派の論争の調停を試みたのである。例えば、カントは運動を「活力」(lebendige Kräfte) によって起こる「自由運動」(freie Bewegung) と「死力」(tote Kräfte) によって起こる「不自由運動」とに区別した。「自由運動」は「その運動の伝わった物質のうちに含まれ、障害が生じない限り無限に持続するという性質を備えている」[2]、「不自由運動」は「恒常的駆動力の永続的作用で、その作用は抵抗を必要とせずに消失するもの、すなわち、外的な力に基づき、その力が停止すればその作用もそれにつれて直ちにやむというていのものである」。「前者の例は発射された弾丸、および一般に投げられた物体、＜の運動＞であり、第二の方の例は、手でそっと押した球とか、その他何かの上にのっている物体、あるいは適当の速度で動かされる物体の運動である」。[3] ライプニッツ派は「力」を本性とする「自然の物体」を扱い、デカルト派は、単なる「延長」を本性とする「数学の物体」を扱った。従って、ライプニッツ派の (mv^2) で活力が測定され、デカルト派の (mv) で死力が測定されるとカントは考えた。また、カントはデカルト派の「数学の運動」に対して、外的原因に依存しない自発的運動であるライプニッツ派の「物体の運動」を受け入れた。ところで、ライプニッツの「単子」とは「窓をもたず」、単子間の直接の相互作用はない、と考えられていたが、カントは心身間の相互作用を積極的に認める考えに立った。果してカントの調停はうまくいったのであろうか。両派は各々の領域を越えて自説を主張する時に誤りに陥った、と彼は考えたのである。しかし、このような調停は誤りであると指摘されている。例えば、「自由運動」と「不自由運動」が区別されているが、これは慣性の法則を正しく理解しておらず、明らかに誤りなのである。実はこの論争については、既にダランベールが「動力試論」(1743年) で公式 $F=\frac{1}{2}m$

v^2を示し、デカルト派のmvは「運動量」を表し、ライプニッツ派の½mv^2は「運動エネルギー」を表していることを示し、この論争の解決を与えていた。カントはそれを知らなかったのである。彼はスイスのゲッチンゲン大学教授で詩人、そして雑誌「ゲッチンゲン学術時報」を発行していたアレブレヒト・フォン・ハラーに処女論文「活力測定考」の紹介文掲載を依頼する手紙（1749年8月23日付け）を出した。この紹介文を見たのであろうが、レッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729－81）はカントを批判して、「カントは世間を教えようと困難な仕事を企てる。彼は活力を測定するが、自分の力を測定しない」と述べた。確かに、カントの調停の試みは失敗に終わった。しかし、カント哲学の精神はそこに溢れている。「活力測定考」の序文で「私は本書を世間の判断にゆだねるが、それについて次のような希望をいだくことが許されると思う。偉大な人々に反対する私の不遜な企てが決して罪とはみなされないであろうことを。かつてはそのような冒険に多くの危険が伴った時代があった。しかし、私の見るところでは、そういう時代は今や過ぎ去った。そして人間悟性はかつて無知と驚歎とのために縛りつけられていた桎梏から、すでに幸いにも脱出した。今や人々は大胆にニュートンやライプニッツの名声をも、それが真理発見の妨げとなる場合には無視することができるし、悟性の導き以外のいかなる説得にも従わないことができるのである」と述べ、如何なる既存の権威にも頼らず、「悟性」の導きのみに従うと高らかに唱っているのである。又、E．カッシーラーによると、この論文の特筆すべきことは「カントが自然哲学の領域に踏み込んだその第一歩が、彼にとって直ちに自然哲学の方法に関する試みとなったことである」、「錯綜した論点を『認識様式』（modus cognoscendi）へと確実かつ意識的に集中させていることが、カントの論文に刻印されている特徴である」(4) と述べている。更に、初期カントにおける内的自発的な力の原理は後の自由な自律的な力として、批判哲学の中で展開していったと考えられる。1750年代のカントはニュートン力学の影響を徐々に受けていきながら、基本的にはライプニッツ派の目的論的世界観に立ちつつ、デカルト派との調停を試み、50年代後半にはニュートンの機械論の考えとの調停を試みたのである。従って、この時期のカント哲学は、ライプニッツ・ヴォルフ学派の影響下にある「独断的、合理的」な「宇宙論的、自然哲学的」な特徴をもっていたといえる。

（3）

1750年代がライプニッツとニュートンに影響された時期であるのに対し、1760年代はヒュームとルソーの影響を受けつつ、同時に伝統的独断的形而上学の方法に反省を加え、形而上学の新たなる方法論の構築に関心が向けられた時期であった。ヴォルフの独断的形而上学は「十分なる理由がなければ、いかなる事実も成立せず、またいかなる判断も真ではない」という充足理由律は同一律に還元できると考え、形式的な理性推理であらゆる存在の問題も解決できると考えた。この問題に関してカントは『神の存在証明の唯一の可能な証明根拠』(Der einzig mögliche Beweisgrund zu einer Demonstration des Daseins Gottes, 1763）で神の存在の証明について、その方法の吟味を試みたのである。

アンセルムスやデカルトの神の存在論的証明（ontologischer Beweis）とは次のような推論である。「神の本質はあらゆる実在性を含んでいる。ところで、物の現存（existentia）も一つの実在性である。従って神は現存する」となる。この証明に対して、カントは「存在は事物の絶対的定立であり、そのことによってすべての述語から区別されうる。そして述語それ自体は常にただ他の事物との関係においてのみ措定される」(5) と述べる。「神の存在は、神の概念の措定の仕方に直接かかわりを持つ。神の存在は述語そのものの中には見いだせないからである。もし主語がすでに存在するものと前提されなかったら、いかなる述語も、それが存在する主語に属するか、単なる可能的な主語に属するかは決定できない。従って存在は決して述語ではありえない」(6)「神がある」（現存する）ということは主語で言い表されているもの自身、＜神＞の絶対的な定立であって、神がいろいろな述語をもつこととは異なっている。存在論的証明はこれらを同一視しているとカントはその誤りを指摘した。しかし、そうは言ってもカントは可能的なものの概念から出発して、神の存在を要請する広義の意味の存在論的証明を否定したわけではなかった。後に述べるが、カントが最良とする方法はこの存在論的方法の枠内にあると言えるのである。

次に経験的概念から出発して神の存在を推論するもう一つの方法について考えてみよう。「存在するものの経験概念から因果律にしたがって独立の第一原因に到達し、そしてこの第一原因から、この概念の論理的分析を通じて

神の属性に至るという証明」[7] は宇宙論的証明（kosmologischer Beweis）としてよく知られている。しかし、この証明も完全に間違いである。仮に、「あるものが存在すれば、他のいかなるものにも依存しないあるものもまた存在する」という命題まで正しい推論であると認めても、「この独立的なものは絶対に必然的であるという命題へ進むプロセスになれば大分信頼度が減ってくる。なぜなら、このプロセスはいつも攻撃の的となっている充足理由律を介して進められなければならないからである」[8] とカントは述べ、哲学の思弁的方法に吟味を試みている。これは明らかにヒュームの懐疑論の影響と思われる。

事物の経験概念から神の存在を推論するもう一つの行き方に「自然神学的証明」（physikotheologischer Beweis）がある。これは「われわれの感覚によって知覚された世界の現象は、たしかに偶然性を示してはいるが同時にそれらすべてにわたってみられる偉大さ、秩序、合目的配置を通じて、知と力と善を備えた創造者の存在を証拠だてるものでもある。すべてのものに行きわたっている偉大な統一は、これらすべてのものの唯一の創造者の存在を証明するものである」。[9] この推論は幾何学的な厳密性を持たないが、十分な説得力を持っているとされる。「ひとは、いつでも感覚されるものの総体から、その無限に偉大な創造者の存在を推論することができよう。しかし、すべての可能的存在の中で最も完全なるものの存在を推論することはできない」[10] として、自然神学的証明は論理的厳密性をもった論証とはいえないと考えた。

それならカントが最良であると考えた証明とはどのようなものであろうか。カントによれば、唯一可能な神の存在の証明とは「あるものが可能であるためには、なんらかの実在するものが前提されなければならない。すべての内部的可能性はこの実在するものによってのみ存在しうる。そして、こういった実在するものは結局神と呼ばれるべきものでなければならない」[11] というものである。カントは十分に固まった考えではないが、形而上学において形式的原理の他に、可能性の根拠としての必然的存在者（神）が存在しなくてはならない、というような実質的原理が大切だと考えていると言える。1760年代からカントは形而上学の原理として同一律、矛盾律の他に、ライプニッツの影響を受けながら「充足理由律」（principium rationis sufficientis）を発展させ「すべて偶然的に存在するものはその存在を先行的に決定する理

由を欠くことができない」という「決定理由の原理」(princium rationis determinatis)[12]を考えてきた。しかし、同じ頃、ニュートンの影響を受けつつ、更にヒュームの因果律批判を知るにつれ、このようなライプニッツ流の実質的原理に反省を加えざるを得なくなってきたと考えられる。「負量の概念を哲学に導入する試み」(Versuch den Begriff der negativen Größen in die Weltweisheit einzuführen, 1763)の最後でも「実質的根拠と、それによって生み出されたり廃棄されたりするところのものとの関係は到底判断の形で表現されるようなものではなくて、ただ概念規定の形でしか表現できない。実質的根拠というものをより単純な概念に分析し、ついに分析不能な単純概念にまで至りつくことはできるが実質的根拠とその結果との関係そのものは決して明確にすることはできない」[13]と述べており、明らかにヒュームの批判を意識していることが伺われる。

次にルソーの影響について見てみよう。1762年から2年間、カントの講義を聴いたことのあるヘルダー(J. G. Herder, 1744−1803)は「彼の講義は、最も楽しい談話の時でもあったのです。ライプニッツ、ヴォルフ、バウムガルテン、クルジウス、ヒュームの思想を吟味し、ケプラー、ニュートンをはじめとする物理学者たちの自然法則につき従う、それと同じ精神をもって、彼は当時世に出たばかりのルソーの著作、つまり『エミール』と『新エロイーズ』を、また彼の知るところとなったすべての自然科学上の発見を受容し、その価値を認め、そして、つねに、自然についてのとらわれのない知識と、また人間の道徳的価値とにたち帰ってきました」[14]と回想している。有名な逸話によれば、カントは1762年頃、出版されたばかりのルソーの『エミール』を読み耽り、有名な午後の散歩を忘れてしまった、と言われている。ルソーの影響はニュートンの影響と共にカント哲学にとって根本的な意味を持つ。それは「実践理性批判」(Kritik der praktischen Vernunft)の結語の中に次のように象徴的に述べられている。「それについてわれわれの考察が一層しばしば、一層継続的に没頭してゆけばゆくほど、いよいよ新たな、そうして増大してゆく感歓と畏敬の念をもって心を満たすのである。すなわち、わが頭上なる星繁き天空とわが内なる道徳的法則とである」。[15]カントはニュートンとルソーによって、二つの自然、つまり「外なる自然」と「内なる自然」について影響を受ける。ルソーの著書との衝撃的な出会いは次のように述べられる。「私は気立てからしても学者だ。知ることを渇望し、また、ものを

知りたいという貪欲な不安にとらわれ、あるいは、一歩進むごとに満足をおぼえもする。一時期、私はこのことのみが人間の名誉を形作ると信じ、無知な賤民を軽蔑した。ルソーがこの私を正道にもたらしてくれた。目のくらんだおごりは消え失せ、私は人間を尊敬することを学んだ。もし、この尊敬が他のすべての研究に、人間の諸権利を顕揚するという価値を与え得ると信じなかったならば、私は私をありきたりの労働者よりずっと無用な者と考えるだろう」。[16] このように、1762年から1763年頃、ルソーの影響を受け、カントの考えは大きく変わったようである。ルソーの「人間よ、人間的であれ」(Hommes, soyez humains) [17] つまり、人間はなによりも人間らしく生きることに努め、自然によって定められて人間の在り方にふさわしく、自己の自然を全うするように心がけなければならぬという考えは1762年の「エミール」発刊当時は十分評価された解釈ではなかったが、カントは独自の仕方でルソーを理解していくのである。同じように「美と崇高の感情に関する観察」(Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen, 1764)、「頭脳の病気に関する試論」(Versuch über die Krankheiten des Kopfes, 1764)等の著書にもルソーの影響が見られる。「私はルソーを文章の美しさが妨げとならなくなるまで読まなければならない。そのとき初めて私は彼を冷静に概観することができる」[18] と述べるほどカントはルソーに熱中し、新しい人間性を学んだのである。

外なる自然の客観性と秩序と合法則性をニュートンから学び、人間の内なる自然、つまり人間性の尊厳、傾向性、道徳規範をルソーから学んだ。例えば、「ニュートンは、彼以前には無秩序と乱雑な多様性しか見いだされなかったところに、秩序と規則性とが偉大な単純さと結び[illegible]いているのを、初めて見いだした。そしてそれ以来、彗星は幾何学的軌道を[illegible]て運行している。ルソーは人間のとる多様な姿の中に、深く隠された法則とを初めて発見した。この法則からみて、摂理は法則の遵守によって義とされるのである」[19] と述べられる。次にルソーの「自然人たれ」ということと、カントの「内なる自然」つまり「理性」はどのようにつながるのか見てみよう。ルソーは「自然の人間をつくりたいといっても、その人間を未開人にして森の奥深いところに追いやろうというのではない。社会の渦の中に巻き込まれていても、情念によっても人々の意見によってもひきずりまわされることがなければ、それでよい。自分の目でものを見、自分の心でものを感じれば良い。自

分の理性の権威のほかにはどんな権威にも支配されなければよいのだ」[20]と述べる。それに対し、カントは「人間にとり、その本性上必然的であるところの欲望は、自然的な欲望である。自然必然的なものによる以外の欲望をもたず、またそれより高度の欲望をもたない人間は、自然の人間と呼ばれる」[21]、「本性を満足させるために要求される多くの知識や、その他の完全性は、自然の単純さである。自然の単純さと自然のつつましさのどちらも身に備えている人間が、自然の人間である」[22]と述べる。カントはルソーに従って文明社会と自然状態、文明人と自然人を対置して考えるのであるが、自然と文明は「自然の開化した人間（自然の文明人）」（ein gesitteter Mensch der Natur）という言葉に統合して考えられている。例えば、次のように述べられる。「どのようにして、技術と優美さ、そして開化した国家組織が遅れて生ずるか、そしてどのようにして、それはある方角では（例えば、家畜がいないところでは）決して見いだされないか、ということを洞察することは必要である。それは、自然にとって異質かつ偶然的なものと、自然にとって固有のものとを区別するためである。われわれが未開人の幸福を考えるとき、それは森に帰るためではなく、むしろただ、われわれが他方で何かを得ることにより、何かを失ったかをみるためである。社交的な贅沢を享受し利用しながら、不幸で不自然な傾向性をもってこれに固着することなく、自然の開化した人間（自然の文明人）のままであるために」と。[23]

カントが学んだ「人間を尊敬すること」とは、万人が備えている人間の尊厳性の発見、人間の自然の発見である。「自分の目でものを見、自分の心でものを感じれば良い。自分の理性の権威のほかにはどんな権威にも支配されなければよいのだ」[24]とルソーは言い、「依存する人間は、もはや人間ではない。彼は、この地位を失ったのである。彼は他の人間の付属物にほかならない」[25]とカントは述べ、人間の本性（自然）は「自由と独立」であり、学問の目標はそれを探求することにあると考える。カントの人間性の賛美は、敢えて神の名によらなくとも、万人の人間性そのものが尊いことを唱えるものである。これは信仰を否定するものではないが、ヒューマニズムの立場に近い考えと言える。

この時期に、カントはルソーの影響を受けつつ、形而上学の方法論について反省するようになる。カントはニュートン力学が確実な学として確立していることを認め「形而上学の真の方法は、ニュートンが自然科学に導入し、

そしてそこで極めて有益な効果を示した方法と、根底において同じである。自然科学において言われるのには、確かな経験によって、必要な場合には幾何学の助けをかりて、自然のある種の現象がそれに従って起こる諸規則を探索すべきであると。形而上学においてもちょうど同様に、確かな内的経験、すなわち直接的な明白な意識によって、何らかのある一般的な性質をもった概念の中に確かに存するような徴表を探し求めよ、そしてたとい諸君が事象の全本質を知らなくても、事物における多くのことをそれから導出せんがために、諸君はそれでもそれらの徴表を確かに利用できるのである」[26]と述べ、学としての形而上学の方法を自然科学の方法をモデルにして模索している。それは「純粋理性批判」において完成した形として表される。それでは、カントがどのように考えていったかを見てみよう。形而上学の方法と数学の方法とを比較して「数学はそのすべての定義に総合的に到達するが哲学は分析的に到達する」[27]と述べており、同一律、矛盾律による形式的推理、そして実質的原理による神の存在証明にも反省が加えられたと考えられる。又、「数学はその解法、および推論において、一般者を記号のもとに具体的に考察し、哲学は一般者を記号を通して抽象的に考察する」[28]と述べる。これは一体どういう意味なのだろうか。幾何学について言えば「例えば、すべての円の性質を認識せんがために、一つの円を描き、その中に、円内で交わるすべての可能な直線の代わりに、二直線を引く。これらについて諸関係が証明され、諸関係において、すべての円内で交叉する直線の関係の一般的規則が、具体的に考察される」[29]のである。他方、哲学的認識は「熟考の都度、事象そのものを念頭におかねばならず、事象そのものの一般的概念の代わりに個々の記号を扱うという、この重要な軽減を利用することができずに、一般者を抽象的に表象することを余儀なくされる」。[30]例えば、「各物体は単純実体から成る、ということを証示しようとするならば、彼は第一に、物体は総じて実体から成る全体であること、実体にあっては合成は偶然的な状態であって、実体はその状態なしにでも存在しうること、したがって一物体におけるすべての合成は、頭の中で止揚され得、しかも物体がそれらから成る実体は存在する、ということなどを確認するであろう。そしてすべての合成一般が止揚されてしまったとき、合成体から後に残るものは単純であるから、物体は単純実体から成るのではなくてはならない」[31]と述べ、哲学的認識を分析的であると考えている。よく知られているように、批判期の哲学になって初めて

数学的認識、力学的認識、哲学的認識が「ア・プリオリな総合的判断」であることが明らかにされるのであるが、この時期はまだ洗練されたものではないが、数学的認識が総合的認識であることや、普遍的なものを具体的記号のもとに考察する認識であることが、既にここで述べられている。他方、哲学的認識は「乱雑なものとして与えられた概念を分析し、精密明確ならしめることである」[32]と述べられ、分析的判断であると考えられている。これは、独断的形而上学の曖昧な形式的推理を批判吟味し、具体的事実を重んじる立場から形而上学の方法は分析的であるべきだと考えたと思われる。

1760年前半から半ばまでは、ルソーの影響が強く、カントは人間性の尊厳、すなわち人間の自由と独立を唱えた。この頃は自然学的傾向をまだ脱してはいないが、人間の本来の在り方を問う倫理学への関心を表している。（後述するが道徳感情の新しい理解は『視霊者の夢』にあらわれる。）人間の自然の在り方が人間の自由と独立をもたらすものであり、人間の本来の在り方であると考えるのである。このカントの姿勢は批判期の自然法則への信頼、理性への信頼、理性の自律の考えに、脈々と流れて行ったと考えられる。伝統的独断的形而上学の批判吟味は学としての新しい形而上学を模索することへとつながる。この時期は形而上学の方法を総合的ではなく分析的であるとカントは考えたが、これは新しい形而上学の構想へと、人間理性の限界の自覚へと、そして理性批判へとつながるものであると考えられる。

註

（1）Jachmann, Brief 1, S. 132.
（2）Kant's gesammelte Schriften.
Herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften.（以下 KGS.と記す）Ⅰ, S. 28.
（3）KGS. Ⅱ, S. 28.
（4）E. カッシーラー「カントの生涯と学説」みすず書房 30頁
（5）KGS. Ⅱ, S. 73.
（6）KGS. Ⅱ, S. 74.
（7）KGS. Ⅱ, S. 157.
（8）KGS. Ⅱ, S. 157.
（9）KGS. Ⅱ, S. 159.
（10）KGS. Ⅱ, S. 160.

(11) KGS. Ⅱ, S. 157.
(12) KGS. Ⅰ, S. 396.
「形而上学的認識の第一原理」
(13) KGS. Ⅱ, S. 204.
(14) Herder, Briefe zur Beförderung der Humanität, 1795, Brief 79.
(15) K. d. p. V. B. 288.
(16) KGS. XX, S. 44.
「美と崇高の感情に関する考察」覚え書き
(17) ルソー「エミール 上」(今野一雄訳、岩波書店) 172頁
(18) KGS. XX, S. 30.
(19) KGS. XX, S. 58.
(20) ルソー「エミール 中」(今野一雄訳、岩波書店) 98頁
(21) KGS. XX, S. 6.
(22) KGS. XX, S. 6.
(23) KGS. XX, S. 31.
(24) ルソー「エミール 中」(今野一雄訳、岩波書店) 98頁
(25) KGS. XX, S. 94.
(26) KGS. Ⅱ, S. 286.
「自然神学と道徳の原則の判明性」
(27) KGS. Ⅱ, S. 276.
(28) KGS. Ⅱ, S. 278.
(29) KGS. Ⅱ, S. 278.
(30) KGS. Ⅱ, S. 279.
(31) KGS. Ⅱ, S. 279.
(32) KGS. Ⅱ, S. 278.